

Lighthouse Times



October 2025

(株)ライトハウスエデュケーション英語対策部

Volume 12



読む力(考える力)



英語＝国語＝数学

英国の大学では「study」の代わりに「read」という動詞が用いられることがあります。たとえば I'm reading law at Oxford. は「オックスフォード大学で法律を学んでいます」という意味です。また、大学生が試験準備をしている際に I'm reading for my exams. と言うこともあります。つまり、英国では伝統的に「読むこと」と「学ぶこと」とが深く結びついてきました。そして、彼らが今日の世界に及ぼした大きな影響を思えば、その考え方を軽んじることはできません。

因みに、読むという行為は、単なる情報収集ではありません。他人の考え方や経験、さらには失敗や成功までを、自分の中に取り入れられる極めて効率的な学習手段です。自分の人生だけでは到底得られない知識や視点を、読書を通じて疑似体験できるのです。若い

世代の言葉を借りると、読書ほど“コスパ”や“タイパ”のいいものはありません。「本を読んだくらいで成功するほど世の中は甘くないよ」という人がいますが、次元がズれています。読んで学習することでやっとスタートラインに立てるのです。「私は本なんか読んだことないけど成功したよ」という人は、偶然の要素が大きかったかもしれませんが、読書的な学習を積んでいれば、もっと早くもっと大きな成功を収めていたのではないのでしょうか。

この「読む力」は、現在の受験制度にも色濃く反映されています。大学入試、特に英語では、ほとんどが読解問題です。なぜならば、読解はあらゆる学問の土台になるからです。入試において英語の配点が他教科より高く設定されることが多い理由の一つもここにあります。(⇒Vol.9: 2025年1月号

“英語学習の根本を考える”) をご覧ください。

また、難関国公立大学の二次試験の英語では、英文和訳や和文英訳の問題がよく出題されます。ここで求められているのは、単なる翻訳作業ではなく、文章全体の論旨を正確に理解する論理的思考力と、それを的確に表現する国語力です。この二つが備わっていなければ、合格レベルの答案を書くことはできません。二次試験で国語が課されることが少ない理系学部でも、英語科目でしっかりそういう力が試されているのです。言い換えれば、「文章を正しく読み取れますか」、「相手に伝えるように書けますか」ということが試されるのです。なぜなら、これこそが知的活動において最も基礎的で、かつ重要な力だからです。 ✓

これはもちろん文系科目に限った話ではありません。理系の学問も、問題を理解し、条件を整理して論理的に答えを導く力、そしてそれを正確に伝える力が欠かせません(学問を文系・理系と分けること自体あまり意味がないと思いますが)。読み、聞いて理解し、考えを深め、自分の言葉で伝える—この一連の力は、受験だけでなく、社会に出てからも人生のあらゆる場面で求められます。むしろ、大人になってからの方が、その重要性をより強く実感するでしょう。社会人としての年月を重ねるほど、この大切さが身に染みてきます。人間に生まれたからこそ楽しむことのできる知的活動は、言語や数式といった表現を通してしか行えませ

ん。文章を読むことを面倒に感じたり、書くことを避けている人は、大きな損失を被っていると思います。スマートフォンや動画が日常になった今こそ、「読む」という行為の価値を、改めて見直してみませんか。紙でもデジタルでも構いませんが、文章にじっくり向き合う姿勢が、あなたの未来を確実に変えていきます。

誤解してほしくないのですが、インプットばかりの“頭でっかちな”人間になることを勧めているわけではありません。しっかりしたアウトプットは、しっかりしたインプットがあってこそなのです。「経験に勝る学びはない」と言われますが、経験の前でも、最中

でも、後でも、自分の頭でしっかり考えるためには“知的栄養”が欠かせません。その栄養を普段からしっかり取り入れてほしい、というのが今回の筆者のメッセージです。入試問題を作る人や採用面接を行う人が、「学びを取り込み、自分の頭でしっかり考え抜く力」を試そうとするのは、まさにそうした人材が求められているからだ、最近つくづく感じています。

ご質問やご意見は
msakuta@lhedu.jp までどうぞ。

